

奈良飛鳥の旅 2019



2019年4月

旅のチカラ研究所 植木圭二

いにしへの日本の都、奈良そして飛鳥を訪ねる2泊3日の自動車旅行に行ってきた。メンバーは私を入れて4人、地元の住職に案内してもらおうという奈良好きの私にとってはたまらない探究の旅になったので紹介する。

■不思議な巡り合わせ

クルーズで知り合いになった鳩原（にゅうはら）さんから奈良に行かないかというメールが入ったのが1ヵ月前のことだ。私は是非参加したいと返信した。そして今、私が運転する車の助手席には彼が座っている。

彼は私よりもかなり年上だが、そのバイタリティや体力には頭が下がる。85才にして、旅に、英語に、テニスに、俳句に、大学の聴講生にと人生を存分に楽しんでいる。私が師匠と思っている人だ。

そして後部座席には彼が連れてきたプール仲間の男女が座って他愛のない話をしている。男性は片山さんで、女性は新井田（にいだ）さんだが、2人とも私とは初対面だ。

連れてきたという表現は間違っているかもしれない。私が後からお邪魔した関係なので旅の主体は彼らにある。何でもプールで泳ぎながら奈良旅行が決まったという不思議な人たちだ。

今回の幹事は片山さんで、朗らかで屈託のない人柄で土木関係の仕事をしていたという。旅の計画や宿の手配も彼がしてくれた。聞けば奈良のお寺の息子で、これから行くところで生まれ育った人だ。

■奈良を巡る

本日は平成31年4月1日で新元号発表の日で、奈良に向かう車の中で新元号「令和」を聞くことになるうとは、こんな歴史的な日に古都巡りが出来るなどと思ってもよらなかった。

まずはお決まりの寺、奈良市の真ん中にある興福寺と東大寺を訪れる。いつ来ても興福寺の五重塔は重厚で、東大寺の大仏は大きく威厳がある。この重厚感や大きさが1300年という時間の積み重ねを感じさせてくれる。

満開の桜の木が、春の古都の装いに花を添えている。観光客はいつものように多からず少なからずで、ちょうどいい。私が奈良を好きな理由のひとつは観光客があまり多くないところで、そのためなのか街や寺社には落ち着きがある。

4月1日といえば学校は春休みのはずなのに修学旅行の生徒の姿が多いのに驚く。最近の修学旅行は自主性を重んじたグループ活動になっていると、4人の子どもの持つ新井田さんが教えてくれる。だから学校によっては時期を問わずに、空いている時を選ぶのだろう。

生徒たち数人がグループを組み旅行を計画して学校の承認を得るというもので、先生の引率も無いという。昨今はインターネットを駆使して情報を集めれば簡単なことだろう。旅の計画から実行までを自主的に行うというのは中高校生にとっては良い経験になる。そういうものが本来の修学旅行なのかも知れない。

問題はその計画を評価する学校の先生の方だろう。片手間でやるのでは難しいのではないだろうか、旅の専門家として要らぬ心配までしてしまう。

東大寺大仏殿の屋根の大棟の両端に沓（くつ）を逆さにしたようなものが付いている。大仏殿の中にある売店のおばさんに聞くと、その名前は鷗尾（しび）という。親切な彼女は紙に書いて漢字まで教えてくれた。さすがにここに勤めている人は博識だ。大仏殿の中にも鷗尾が置いてあるので質問されることもあるのだろう。

鷗尾は飛鳥時代に中国から瓦と共に伝来したもので、この後に魚などに進化したので鯨（しゃちほこ）にもなったという。鯨は想像上の海獣だという。



宿は奈良市内から離れた橿原神宮の近くにとってもらっている。夜は近くの居酒屋に繰り出して酒宴に至る。この旅は面白くなりそうだ。

■ 橿原神宮

朝の橿原神宮を参拝する。すれ違う早朝ウォーキングをする地元の人たちと軽く会釈をしながら、境内の中へと進んで行く。ここは大きい、そしてとても威厳を感じる神社だ。

朝なので少し肌寒い中、緊張感というか神聖な神社特有の張りつめた空気が私たちを包んでいる。私はこの空気感がたまらなく好きだ。

神話の世界の話では、天照大御神の子孫の邇邇藝命（ににぎのみこと）が三種の神器をたずさえて高天原から高千穂峰へ降りたのが天孫降臨（てんそんこうりん）で、それから4代目に当たる神武天皇が数々の苦難を乗り越え大和を征服し、畝傍山（うねびやま）の麓の橿原の地に都を開いた。これが皇紀元年、天皇家が始まった年とされ西暦では紀元前660年といわれる。

そして今、私たちが立っている場所は神武天皇が都を開いたとされている日本で最初に皇居が置かれたところだという。

明治時代になって、この場所に橿原神宮が建てられた。もちろん祀っているのは神武天皇だ。だから天皇家にとっては歴史的な神社で、平成が終わろうとしているつい最近に現天皇（平成天皇）がこの神社に参拝に来ている。

■飛鳥京

橿原市の隣に明日香村がある。現在の地名は明日香村だが、昔は飛鳥京という都が置かれていた。飛鳥京は日本書紀にも記述があり、実際に発掘するとそれを裏付ける数々の遺跡が出ているので橿原神宮とは異なり学術的な裏付けがある。

聖徳太子が摂政になった593年から694年までの102年間は飛鳥京の時代で、その後は藤原京に移り、710年に奈良の平城京に移った。

飛鳥京と藤原京の時代を合わせて飛鳥時代というのが一般的で、それよりも前の時代は古墳時代と言われているので、飛鳥京はいわば国家の体を成した最初の都である。

万葉集からとったという新元号「令和」が発表され、万葉集は飛鳥時代後半から編さんされたものなので、飛鳥京は賑わいを見せ始めている。

■向原寺から始まる

本日は飛鳥京を巡るので、まずは日本最古の寺ともいわれる「向原寺」を訪れる。片山さんの伝手で、この寺の住職に飛鳥を案内してもらおうという凄い行程になっている。

私たちの飛鳥の旅はこの向原寺から始まる訳だが、日本の仏教もこの寺から始まったという。

仏教伝来は飛鳥時代よりも少し前の538年と学校で教わった。百済の聖明王から仏像が贈られたことから日本の仏教は始まる。その仏像が置かれたのが蘇我稲目の家で、向原の家と呼ばれていた今の向原寺のある場所だという。本堂脇には当時の遺構が発掘されている。

いつの世でも新しいものに対しては反発があるもので、仏教を広めようとする蘇我氏と対立する物部氏は疫病の流行など世の中の乱れは外来の仏教を広めようとする行為が日本古来の神の怒りがかつたものだと主張して、家を焼き払い、仏像を「難波の堀江」に捨てたという。

その難波の堀江が寺の隣にある。堀江というよりも小さな池だが、昔はもっと大きかったのかも知れない。

難波という言葉から大阪の難波とする説もあり、この辺りが古代の歴史をひもとく時に想像と創造が加わるから面白い。



写真は向原寺本堂脇の遺構と難波の堀江。

そして蘇我氏と物部氏が争い、蘇我氏が勝って物部氏は没落する。ライバルがいなくなり唯一強大になった蘇我氏だが、実質的最高権力者の蘇我入鹿が暗殺される。それが「乙巳（いっし）の変」と呼ばれ、それによって蘇我氏も没落する。

そこから天皇中心の律令体制の政治が始まる。西暦 646 年、有名な「大化の改新」である。その時の元号「大化」は日本で最初の元号で、その後「令和」まで実に 248 の元号が使用された。

さて、難波の堀江に捨てられた仏像は、「本田善光」という人がこの池で仏像を見つけて、出身の信州に持ち帰り寺を建て安置した。その寺が有名な「善光寺」になる。そのような由来なので善光寺は無宗派の寺になっている。

ついでに書くと山梨県甲府に「甲斐善光寺」という寺があり、川中島の戦いで武田信玄がこの仏像を自国に持ち帰り建てた寺だ。仏像は武田家滅亡とともに信州の善光寺に戻ったが、武田が織田信長に滅ぼされなければ、甲斐善光寺が今は善光寺を名乗っていただろう。

歴史とは、権力と宗教とそして争いが作っている。

■飛鳥資料館

飛鳥資料館に行く。飛鳥全体のことがよく分かるのでこういう場所を先に訪れるのが正解だろう。各展示は上手に工夫されている。例えば飛鳥京の全体が分かるように街の模型が置かれた周囲の床には航空写真が貼られている。巨人になって街を歩いているようで実に分かり易い。



石像がいくつも置かれている。これらの石像を私は過去にどこかで見た気がする。

韓国の済州島だ。サングムブリという火口跡の公園に立ち寄った時、公園入口に石像が立っていた。イースター島のモアイ像を小さくして長い顔を丸めたような風貌をしているあの像だ。

済州島は百済だ。ここで私の中で百済と飛鳥がつながった。



写真左は飛鳥資料館の石像、右は済州島の石像。

■飛鳥京の南北の寺

飛鳥京は現在の明日香村よりもずっと狭い範囲だったという。北の端が飛鳥寺で、南は橘寺というから地図で見ると 1km 四方の大きさだ。

飛鳥寺に行くと日本最古の大仏がある。大仏といっても 3m 弱で、奈良や鎌倉の大仏と比べようもないが最古というのは凄い。いろいろ難を逃れて今に至っているようで修復の跡が痛々しい。

大仏はやや右を向いて鎮座している。いや大仏が右を向いているのではなく、大仏は頑丈な石の台座に設置されており動かさない。寺は何度か再建されているので、何だかの理由で建物が左を向いているのだろう。写真は建物正面から撮ったものになる。



聖徳太子が生まれた寺ということで有名な橘寺に行く。本尊はもちろん聖徳太子像で、至るところに聖徳太子ゆかりのものがある。

十七条の憲法の第一条が掛け軸にある。「和（やわらぎ）を以て貴（たつ）しと為し、忤（さか）うこと無きを宗とせよ」と仮名がふられており、私の知っている読み方と違う。

「和」を「やわらぎ」と読むのかと感心してしまう。



しかし、よく考えると日本書紀にある十七条の憲法の原文は漢文なので仮名は後世の解釈の違いだろう。

新元号「令和」には「やわらぎ」があると分かっただけでもここに来た甲斐がある。

ここで片山さんが新井田さんに「聖徳太子は誰の子供なの？」と何気なく質問する。するとすかさず「用明天皇の子でしょう。」と答えが返ってきた。片山さんだけでなく私も驚く。世間に歴女は多くいるが、そんなことがスラスラ出てくる歴女には会ったことがない。

これはとんでもない人たちと旅をしているのだと少し身震いがしてきた。ついでに彼女はフランス語をしゃべるといふから凄い。

■飛鳥の古墳

せっかく飛鳥に来たのだから有名な石舞台古墳を訪れる。私はこの遺跡が好きで何度もきているが、今回は桜の季節なので和（やわらぎ）がある。

石舞台古墳は元々土に覆われていたらしいが、その土が失われて巨大な石を用いた横穴式石室が露出している。古墳時代後期のもので埋葬されているのは蘇我馬子だという説がある。



石舞台と同じような古墳が街中の民家の脇にある。飛鳥駅近くにある岩屋山古墳もそのひとつで、好き勝手に入れるので子供たちの良い遊び場になっている。この古墳も他の土地ならば観光名所になっているだろう。

有名な高松塚古墳はこんもりした山に高い松の木があったので高松塚と呼ばれていたという。山というよりも人工的なものなので盛土と言った方が大きさとしても適当だろう。ただ 1400 年も経っていれば盛土の上にも樹が生えて人工物か否かは区別できない。

そして中には石舞台のような石室があり、あの有名な壁画が現れた。

高松塚古墳の発見によって、住民がキトラ山と呼んでいた場所にも同じようなこんもりした盛土があるので、これも古墳ではないかということで発掘が始まる。そして 1983 年にキトラ古墳が発見される。高松塚と同じように歴史的発見と報道された。

そんな話を住職から聞いたので、鳩原さんも片山さんも、こんもりした山も見つけるとこれは古墳ではないか盛んに聞いてくる。確かにそう言われるとそう見えないこともないが、古代のロマンはいい年をした大人までも子供に還らせてしまう。

キトラ古墳は調査の結果、予想以上に劣化が激しいので石室の壁画を剥がして別の場所に保管した。古墳に石だけが戻されて再度盛土され元の姿になっている。その古墳の隣の敷地の地下には壁画古墳体験館「四神の館」という近代的な大きな施設があって、古墳から出た壁画を保管している。その他に発掘当時の様子や学術的な説明が詳しく展示している。

キトラ古墳の石室内の壁画は、上面には東洋最古の天文図、東西南北の壁にそれぞれの方角に対応した朱雀、白虎、青龍、玄武という四神が書かれている。

それらの展示は私が見ていてもとても興味深い。修学旅行で来ている中学生たちが勉強のためにノートにいろいろ転記している。彼らはこの古代の遺跡に何を感じているのだろうか。



キトラ古墳もふくめ体験館や周りの公園が国営の公園になっている。壁画を保管しているスタッフに聞くと文化庁と言うから文部科学省だ。しかし公園や建物は国土交通省の管理で、働く人も国土交通省だというから複雑だ。現在の日本の縦割り行政というものを肌で感じる。

キトラ古墳に眠っていた人は恐らく大化の改新の頃を生きただろう。だとすると律令制度による国造りの結果が、こんな縦割り行政に進化させてしまったと驚いているのに違いない。ただ鎌倉時代の盗掘によってその遺体はない。

■水を使った都

飛鳥京には水を使った施設が多い。古代ローマも水道が完備されていたが水の確保が目的だった。それに対してこちらは豊富な水を活用するという点で一歩進んでいる感じがする。

日本で最初の水時計という水落遺跡がある。水時計は漏刻ともいい、水が漏れる時間を測る。階段状に置いた水槽の上から水を少しずつ流し一番下の水槽に水が溜まり水位が時間とともに上がる。役人がその水位を読み、鐘を突いて時を知らせる仕組みになっている。

この時代に時間を管理していたということになる。それは労働時間といったものだろうか。そもそも時間管理をするというなら、重さや長さも既に管理出来ていたに違いない。

亀形石造物というのがある。湧水を小判形の石の水槽に落とし、それが亀形の石の水槽に繋がっている。どちらの水槽も現代的で古い感じがしない。周囲には階段状に石が積まれた大規模なもので、用途は分かっていないが、亀が縁起物だったならば神聖な儀式に使われたのだろう。

その近くに酒船石という人工的な模様がある大きな石もある。こちらは用途不明らしい。

■古都を保存する

本日は民宿に泊まる。一般的には民宿といっても改装して小さな旅館風なものが多いが、この宿は普通の民家だ。旅を生業にする私にしてもこんな感じの民宿はあまり泊まったことがない。さすがに片山さんだ、いやこれは住職の紹介らしい。

その住職も一緒に夕食の食卓に着いているので色々な話を聞くことになる。

実は住職は明日香村役場の役人だったという。学校を出て村役場に就職して寺の住職と2足の草鞋を履いた。就職して最初に渡されたのが「文化財保護法」という本だったという。そこから彼の人生が変わったという。

1949年法隆寺金堂の火災により、法隆寺金堂壁画が焼損した。これをきっかけに、議員立法により文化財保護法が制定された。ただこの法律でも古都を守ることはできないという認識から、古都3都市選出の議員らが中心になって、またもや議員立法で1966年に古都保存法が制定された。

しかし明日香村は私有地ばかりなので、この村に特化した明日香村特別措置法が1980年に制定された。古都保存法の「古き良きものを守る」を基本としながらも、住民の生活のさらなる向上が不可欠という考え方で、明日香村を創造的に創り直していくのがその法律だという。

つまり保護一辺倒でなく、創造という要素を入れた。これは非常に興味深い。

住職の熱弁にその熱い思いが伝わってくる。

そう言えば私たちを案内しながらも村の将来の姿にこだわっていた。例えば駐車場は各観光施設にあって、いちいち駐車料金を払い、各施設間を車で移動する。これを廃止して、村の四方の入口に大きな駐車場を置いて村内は自転車や無料バスで巡回するのようにしたいと語っていた。

さらに宿泊施設も飛鳥らしい宿が必要だと、普通の民家を民宿にしてもらうように仕掛けたという。その時に始めた民宿に本日私たちが泊まる。だからこの民宿にも顔が効くようだ。

それにしても保存法などは議員立法が多い。日本の法律は行政つまり役人が作り、国会で審議するものが圧倒的に多く、国会議員が作り審議するいわゆる議員立法は少ない。いわば役人が国の形を作っているといっても過言ではない。

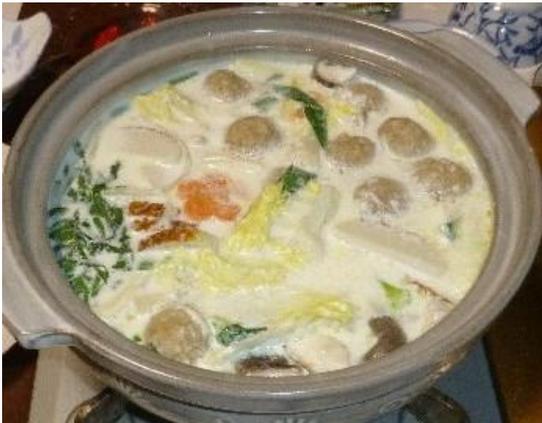
大化の改新とは律令制の導入だ。その律令制とは巨大な官僚機構による統治で、その構図は現在もあまり変わっていない。そろそろ新しい形になってもいいような気がする。

この古都飛鳥では、寺の住職が村の役人になっている。だから発想が住民目線で、熱い思いも込められる。日本の新しい姿は案外、古都にあるのかもしれない。

温故知新、いやもう一歩進んで、古きを守って新しきを創造する。

■飛鳥鍋

夕食は「飛鳥鍋」という地元料理をいただく。名前の由来は分からないが、牛乳ベースの白い出汁に鶏肉や野菜を入れて煮込むもので、あっさりとも、こってりともしている。不思議な鍋だが、それがなかなか美味い。



私が無気なく「鍋奉行は誰？、悪代官は誰？、私は町娘をやりますよ。」と言ったところで片山さんは食べている箸を置いて反応する。「何ですか？、それは？」と質問が返ってくる。

私の仲間内では鍋を囲む時に、全体を指図する「鍋奉行」を決める。そしてアク取りを専門にする「アク代官」も決め、それ以外は「待ちむすめ」という役割になっている。今日の私は待っているだけの待ちむすめ（町娘）ですよと説明する。

この分担の名前が妙に面白かったようで、片山さんは子供のように興奮して喜んでいる。今回の旅の一番の収穫かもしれないと言ってくれる。私にとっては当たり前の話が、こんなに盛り上がると思ってもよらなかった。そしてそれが何故か嬉しい。

片山さんが私にビールを注いでくれる。私はすかさず彼の手元にあるグラスに向かってビールを注ぎ返す。その時に私が発した言葉にも彼はいたく感動したようだ。

私が昔勤めていた会社の職場の飲み会では当たり前のように使っている言葉があった。それは「注がれたら、そいつのグラスを見ろ！」だ。

その言葉にも感動して「酒飲みは飲みたいときに注ぐのですよね。」と言っている。些細な言葉だが、心理と真理をついているので気に入ってもらえたようだ。

こんな他愛もない話ではあるが、85才の鳩原さんがいつも言っている3つの交流が重要なのだと再認識する。「異文化交流」「異世代交流」「異業種交流」だ。これが若さを保つ秘訣なのだろう。

3つの交流によって、昨晚に続いてとことん盛り上がる夜になる。

■甘樫の丘

翌朝、民宿の近くにある「甘樫の丘」に登る。丘といっても標高148mの小高い山だ。

この丘は飛鳥京の直ぐ西に位置しており、飛鳥京を一望できる。昨日見てきた石舞台古墳も飛鳥寺も見ることが出来るので位置関係が良く分かる。さらに万葉集で有名な天香久山（あまのかぐやま）も見える。

私はこの丘に初めて登るが、感動したのはそこから見える歴史である。

天香久山の左の方に広がっているのが飛鳥京の後に都が移った藤原京で、その向こうには奈良の都が見える。それは720年に遷都した平城京だ。その向こうの山の彼方には京都がある。京都は平安京で794年に遷都された。都は遷都するたびに大きくなっているように見える。

つまり飛鳥から始まった日本の都が一直線に並んでいる。これは古代日本の歴史好きには感動的な光景だ。



天香久山の横を通り抜けて行くと車の中で新井田さんがちょっと面白い話を始める。彼女はフランス語をしゃべるがイタリア語も勉強中という。その先生のイタリア人から聞いたという。

日本では山の言い方が「やま」と「さん」の2通りある。例えば「あまのかぐやま」と「ふじさん」だ。その使い分けを調べると「△△さん」というのは信仰の山で、「○○やま」というのは信仰のない普通の山だという。

確かに言われてみればそんな気もする。信仰のある高野山も高尾山も「さん」で、信仰を聞かない天香久山や浅間山は「やま」になっている。

そして車の中では、私を含めた男たち3人がこの仮説を何とか崩そうとしているから面白い。

スーパー歴女は興味深い宿題を出してくれた。この宿題は今回の旅の土産に持ちろう。

■法隆寺

今回の旅の最後に法隆寺を訪れる。法隆寺は今さら書く必要もないが、聖徳太子が建立した日本最古の木造建築の寺だ。

85才の鳩原さんは前回来たのが修学旅行の時だったと言っている。

一体いつの話なのだろうかと計算すると、中高校生の頃なのでざっと70年くらい前だ。奈良の都に平城京が置かれていたほどの年月になる。



境内には修学旅行の生徒もいるが、目に付くのはバスガイドの研修を受ける一行だ。10人くらいがひとかたまりになって、ちょっと年増の先輩バスガイドが一行を率いている。バス会社もいくつかあるようで制服の違いでそれが分かる。

一生懸命にメモを取っている彼女たちは、つい1ヵ月前までは学校に通っていたのだろう。その初々しさとどこか不自然な化粧が、先輩の厚化粧と対比してとても印象的だ。

広い境内を歩いていると様々な建物があり、鴟尾を探して屋根を見ていると鬼瓦があり、鯨もある。鯨は城だけのものと思っていたが、私の常識は覆された。

昔の寺は、中国から学問、芸術、建築などが入ってきて国内に伝えていく役割もしていた。現代の常識で考えてはいけない。何しろ寺は外来宗教の拠点であり、僧侶は仏教を学ぶため留学し、そして布教と修行のために日本全国を回り歩くという生活をしてきた。

寺は、言わば文明の出入口（ゲートウェイ）だった。そういう寺の原点が奈良にはあるような気がする。

今日も法隆寺には老若男女が訪れている。半分くらいは外国人で、欧米以外に中国、インド、東南アジアなど多くの人たちが参拝に来ている。

来るもの拒まず、誰でも受け入れるという寺の度量が感じられる。だから 1400 年もの長い間繁栄してきたのだろう。その度量とは、言い換えると「異文化交流」「異世代交流」「異業種交流」になるかも知れない。

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」と正岡子規が詠んだように法隆寺には柿と鐘の音が似合う。残念ながら柿の季節でないので、代わりに茶店で名物の「柿の葉寿司」を食べる。鐘の音に送られて私たちの古都の旅が終わる。

■旅の記録

2019年4月1日（月）～3日（水）の3日間の奈良飛鳥4人旅を記録する。行程、訪問場所を以下に示す。

- ・1日目 高速道路（海老名 IC～巨椋 IC）、興福寺、東大寺、檜原オークホテル泊
- ・2日目 檜原神宮、向原寺、飛鳥資料館、石舞台、飛鳥寺、橘寺、キトラ古墳、高松塚古墳、岩屋山古墳、欽明天皇陵、吉備姫王の墓（猿石）、飛鳥京跡苑池、亀形石造物、酒船石遺跡、飛鳥水落遺跡、民宿北村泊
- ・3日目 甘檜の丘、法隆寺、法隆寺 IC～海老名 IC

費用は全体で約 14 万円、ひとり当り約 3.4 万円になった。

- | | |
|------------------------------|-----------|
| ・参拝費用（拝観料、駐車代、入場料など）4人分 | 約 25000 円 |
| ・宿泊費 檜原オークホテル 7252 円（朝食付）4人分 | 約 29000 円 |
| 民宿「北原」 | 約 31000 円 |
| ・昼食代、謝礼など | 約 24000 円 |
| ・ガソリン代（全行程約 1000km） | 約 9000 円 |
| ・高速道路 9750+420+8080 円 | 18250 円 |